

【目的】養護老人施設入居者を対象に口腔内状況，咀嚼能力，生活機能の状況を調査し，現在歯数が高齢者の健康状態及び日常生活の活動性とどのように関連しているかについて調査した。また，これらについて高齢者自身による自己評価と併せて施設職員による客観的評価を行い両者の違いについても検討した。

【方法】岡山市およびその周辺の養護老人施設に在園する 65 歳以上の高齢者 207 (男性 57, 女性 150) 名を対象とした。1)口腔内状況は面接で，また，生活機能については老研式活動能力指標を用い，被験者本人及び施設職員に対し面接ないしはアンケート調査を行い，主観的及び客観的見地から評価した。2)咀嚼能力は，主観的評価については「山本式総義歯咀嚼能力判定表」より選択した噛みごたえの異なる 5 段階 15 食品名を，客観的評価のためには G-1 ゼリー法を用いた。

【結果】1)被験者の年齢は 65-74 歳 47 名，(23.3%)，75-84 歳 95 名(47.0%)，85 歳以上 60 名(29.7%)であった。2)今回の調査では各年齢階級間に咀嚼能力及び生活機能の差は認められなかった。3)口腔内状況は，現在歯 20 本以上 14 名(6.9%)，同 19-10 本 21 名(10.4%)，現在歯 9 本以下で義歯装着者 119 名(58.9%)，現在歯 9 本以下で義歯非装着者 48 名(23.8%)であった。4)現在歯数が多い者ほど咀嚼能力，生活機能とも高い傾向を示し，義歯装着者では非装着者に比較して咀嚼能力，生活機能とも高かった。5)咀嚼能力(主観的・客観的)が高い者ほど生活機能も高い傾向が認められた。6)咀嚼能力，生活機能とも主観的評価の方が客観的評価より概して高かった。